‘A Painful Case’の内面描写

―チェーホフ「犬を連れた奥さん」との比較―

中　尾　真　理*

‘A Painful Case’ and Chekhov’s ‘The Lady with the Dog’:
Joyce’s Strategy for Short Stories

Mari NAKAO

要　　旨

ジョイスが二十二歳から二十六歳の時に書いた短編小説集『ダブリンの人びと』はその後の作品のテーマに発展する要素を多く含んでいるが、「ラヴ・ストーリー」と呼べる物語はその中にはない。反対に「愛の欠如」をテーマとした短編は幾つかある。「痛ましい事件」もその一つである。これは審美家で、俗世間からできるだけ距離を保って暮らしている、独身の中年銀行家が恋愛を取り逃がす物語である。ダッフィ氏は音楽会の会場でたまたま隣り合わせた女性（シニコウ夫人）と、親交を深める。だが、感受性の強いシニコウ夫人が肉体的接触を求めるそぶりをしたことに驚き、「魂の救いがたい孤独」を主張して一方的に交際を打ち切ってしまう。四年後、ダッフィ氏はシニコウ夫人が、飲酒癖により鉄道事故で命を失くしたことを知って驚愕する。語り手はその直前まで、ダッフィ氏の内面を語ることをしないが、後半、ダッフィ氏が女性の死を知った後は一転して、ダッフィ氏の内面に視点を合わせ、彼が愛の喪失を認め、自己覚醒する過程を綿密に描き出す。ダッフィ氏は自説を主張するのに忙しく、シニコウ夫人の孤独に思い至らなかったのだ。

本稿では、中年の銀行家が若い人妻と親密になるという、よく似た設定の同時代の作品、チェーホフの「犬を連れた奥さん」（1899）と比較することによって、「痛ましい事件」の作品理解を深めることにする。ラヴ・ストーリーである「犬を連れた奥さん」の内面描写と比較することによって、ジョイスの短編小説の特質を明らかにし、その戦略と技巧を解き明かすのが目的である。

【キーワード】ラヴ・ストーリー、『犬を連れた奥さん』、内面描写

Ⅰ. 愛のない物語

(一) *Dubliners*とラヴ・ストーリー

ジェームズ・ジョイスの『ダブリンの人びと（*Dubliners*）』（1914）に収められた十五編の短編には、人生のさまざまな局面が描かれているが、恋愛はほとんど描かれていない。短編小説集としてこれは、考えてみれば、奇妙なことである。『ダブリンの人びと』も恋愛をまったく排除しているわけではない。子供時代を描いた三編のうち、「アラビー（Araby）」は少年の初恋を描いている。しかし、友人の姉に

平成26年９月17日受理　*教養部教授

寄せる少年の気持ちは、少年の人生経験が浅いために、憧憬や魅了の気持ちが膨らみすぎ、大きな失望と幻滅を引き起こす。そのギャップが深い感動を引き起こす作品である。また、青春期を描いた四編のうち、「イーヴリン（Eveline）」は父親の認めない船員と駆け落ちする十九歳の娘の話である。これこそラヴ・ストーリーでなくてなんであろう。しかし、「イーヴリン」を読むと、そこに描かれているのは相手の青年への想い（love）ではなく、家を離れることへの不安である。しかも、イーヴリンは散々迷った挙句、土壇場でブエノスアイレス行きを決行できずに終わってしまう。作品のクライマックスは、恋人の必死の呼びかけも耳に入らず、すくんで死んだような状態に陥ったイーヴリンの姿である。まさしく「麻痺（paralysis）」の状態であり、ラヴ・ストーリーというよりも、「愛の欠如（lovelessness）」[1]を描いたという方がふさわしい。

同じく、「下宿屋（The Boarding House）」も若い勤め人と下宿屋の娘の恋愛に題材をとっている。下宿人と下宿の女主人、その娘をめぐる話と言えば、漱石の『こころ』と同じ題材であるが、『こころ』の品格のある下宿のたたずまいとは異なり、ジョイスの ‘The Boarding House’ の下宿は ‘vulgar’ である。下宿屋に下宿する若い勤め人ドーラン氏（Mr Doran）にとって、それは「遊びの恋」のつもりであったのである。ところが、下宿の女主人は元をただせば肉屋の娘、「牛刀で肉を切るように」容赦なく事の解決に乗りだしてくる。そのような母親を持つ娘と、意に沿わない結婚をする羽目に陥ったことを知って立ちすくむドーラン氏。これもまたダブリンの ‘paralysis’ の状態を表しているのである。作品は、ドーラン氏と、うまく結婚話がまとまったことを喜ぶ娘のポリー（Polly）の両者の内面を、よくできた映画のカットのように、双方から描き出して終わっている。

純粋なラヴ・ストーリーはないのだろうか。『ダブリンの人びと』の最後を飾る「死者たち（The Dead）」には、恋人に会うために雨の中を、病身を押してやってきた、田舎の青年マイケル・フューリー（Michael Furey）の愛と死が語られる。しかし、それはこの短編の中心を占めるエピソードではない。主人公はゲイブリエル・コンロイ（Gabriel Conroy）、つまり、大学教師になっているジョイス自身である[2]。彼は妻の口からその話を聞かされ、妻にそのような恋愛経験のあったことに驚く。ゲイブリエルは「これまでどんな女性にたいしてもそのような気持ちを感じたことはなかった。しかし、そのように感じるのが恋に違いないということは知っていた」（He had never felt like that himself towards any woman but he knew that such a feeling must be love.）（224）[3]と衝撃を受ける。このショックが自己満足的生活を送る主人公を覚醒させ、この長い短編の最後のところで、主人公が新たな再生への道をたどり始めるきっかけとなるのである。

このように、『ダブリンの人びと』には「愛の欠如」は描かれているが、ラヴ・ストーリーは描かれていない。その代り、「愛の欠如」は主人公を痛切な自己覚醒へと導く。ただし、この覚醒はゲイブリエルの場合のように、いつも新たな再生への道につながるというわけではない。多くの場合、主人公は失望と絶望のはざまでただ立ち尽くすのみである。

この「愛の欠如」から「エピファニー（epiphany）」[4]へ、というパターンは、『若き芸術家の肖像（*A Portrait of the Artist as a Young Man*）』でも繰り返される。その主人公スティーヴン・ディーダラス（Stephen Dedalus）は次々に幾つものエピファニーを体験するが、完全に解き放たれて自由に創造の世界を飛翔するまでには達しない。自由な境地に到達するには、さらに多くのエピファニーを体験しなければならないようだ[5]。

要するに、ジョイスは『ダブリンの人びと』では主に「愛の欠如」を描き、恋愛そのものは描いてはいない。ただ、ひとつ微妙な例外と言えるのが、中年期を描いた作品のひとつ「痛ましい事件」である。

（二）ティンダル によるDubliners 批評

ここで、『ダブリンの人びと』と「痛ましい事件」の位置づけを確認しておきたい。数多いジョイス研究書の中で、『ダブリンの人びと』を扱ったものはあまり多くない。その中でウィリアム・ヨーク・ティンダル（William York Tindal）の*A Reader's Guide to James Joyce*（1959）は今も基本必読の書と言えるだろう。半世紀以上も前に出たものだが、この時点でここまでジョイスを理解していたことにいささかの感慨を覚える。『ダブリンの人びと』を扱っているのは第一章で、初めの総論の部分が優れている。

ティンダルは『ダブリンの人びと』をこれ一作だけで読むのではなく、『室内楽（*Chamber Music*）』から『フィネガンズ・ウェイク（*Finnegan's Wake*）』までを視野に入れ、特に『若き芸術家の肖像』から『ユリシーズ（*Ulysses*）』に発展する「継続（continuation）」の中で読むように注意している。ジョイスが一作ごとに発展してゆくタイプの作家であることを考慮したのである。また、『スティーヴン・ヒーロー（*Stephen Hero*）』と『若き芸術家の肖像』の主人公スティーヴン・ディーダラスには作者自身が投影されており、したがって、ありふれたものの中に崇高なものがあるという、スティーヴンのエピファニー理論は『ダブリンの人びと』でも有効だとしている。スティーヴンをほぼジョイス自身と考えるティンダルのこの考えに、筆者も賛成である。

さて、ティンダルによれば、『ダブリンの人びと』十五編の短編をつなぐテーマは「麻痺（paralysis）または「生きながらの死（living death）」である。麻痺は「道徳、知性、精神（moral, intellectual and spiritual）」の三つの分野に及ぶ。すなわち、「道徳的麻痺」「知性の麻痺」「精神の麻痺」である[6]。十五編の短編のクライマックスは、道徳的中心が麻痺しているダブリンの市民たちに、「麻痺を自覚させる」ように仕組まれている。

『ダブリンの人びと』において、ジョイスは彼の‘dear dirty Dublin’を一定の距離を置いて見つめ、リアリズムに徹して、客観的に描いているように見える。しかし、実際には彼の個人的な体験（private horrors）がこの作品には含まれている（Tindall, p.6）。ジョイスにとって『ダブリンの人びと』は祖国を出るための理由であり、言いわけでもあった。したがって、『ダブリンの人びと』は「ただ彼が逃れた世界を描いただけではなく、もし彼が残っていたら、こうもなっていただろうかという世界を描いた絵でもある」のだと、ティンダルは指摘している。登場人物の多くが、‘possible Joyces’なのである。

その傍証のひとつとして、ティンダルは「姉妹たち（Sisters）」と「痛ましい事件」の二編の主人公に、作者が自分の名前（James）をつけていることをあげている[7]。フリン神父も、また、ダッフィ氏も、ジョイス（=スティーヴン）が「教区司祭」や「銀行員」になった場合を想定して書いたのだ。一方で、「痛ましい事件」の主題は「土くれ（Clay）」と同じ「愛の欠如（lovelessness）」であるとしている。ティンダルのこの考えは妥当であろうか。

（三）短編小説（short story）としての「痛ましい事件」

ジェイムズ・ダッフィ氏（James Duffy）は中年の銀行員（cashier of a private bank）[8]だが、少しでも秩序に乱れのあることを嫌う性分である。要するに審美家なのだ。「痛ましい事件」でジョイスは世

俗からできるだけ離れて暮らす、気難しい審美家の肖像を描いてみせた。友人もなく、信仰もない、プライドの高い、求道者のようなダッフィ氏。数少ない楽しみは音楽である。そのダッフィ氏に、ロマンスめいた出来事がふりかかる。たまたま出かけた音楽会で、隣の席に座った女性から話しかけられたのである。ものおじしない女性の様子にダッフィ氏は驚く。相手は若い娘を伴った、ダッフィ氏と同じ年配の中年の婦人だった。偶然は重なり、その女性と三度目に出遭ったとき、ダッフィ氏は思い切って逢引きの約束を申し込んだ・・・・。

ダッフィ氏にすれば、これはちょっとした日常生活からの逸脱（adventure）である。

この題材ならば冒険物語か悲恋物語、あるいは不倫騒動にでも発展しそうなものだが、ジョイスはそうしなかった。前述のように、「痛ましい事件」の主題は「愛の欠如（lovelessness）であり、また、『ダブリンの人びと』の十五編はいずれも自己覚醒の物語なのである。

「痛ましい事件」はまた、作者自身の評価が低かったことが知られている。何度も改作し、その改作の筆も進まなかった（*Selected Letters*, p.97, 99）。弟スタニスラスに宛てた手紙では、「最悪の二つは『レースの後で』と『痛ましい事件』だ」と言っている（6 November, 1906; *Selected Letters*, p.127）[9]。

さて、本稿では、以上のティンダル説を念頭に置きながら、『ダブリンの人びと』の枠をいったんはずし、二〇世紀の変わり目の一編の短編小説として読んでみたい。方法としては同時代の、似たような設定で始まる、別の作家の短編と比較して読んでみることにする。比べるのはロシアの作家アントン・チェーホフの短編「犬を連れた奥さん（The Lady with the Dog）」（1899）である。こちらも、中年男性が、ふとしたことから始まった道ならぬ恋により、自己覚醒する物語である。比較することによって、ジョイスの短編小説とダッフィ氏の特質を明らかにしたい。

Ⅱ. チェーホフの「犬を連れた奥さん」との比較

(一) チェーホフの「犬を連れた奥さん」

ロシアの劇作家アントン・チェーホフ（Anton Pavlovich Chekhov）（1860-1904）は短編小説の名手としても知られている。彼はモスクワ大学医学部に入学後、生活費と学費を稼ぐため、二〇歳で短編小説を書き始めた。「犬を連れた奥さん」は後期の作で、「小役人の死」「六号室」「可愛い女」などと共に彼の代表作となっている。「犬を連れた奥さん」は銀行家である中年男性を主人公に、若い人妻との許されざる恋愛（adventure）を、三人称の語りで描いている。書かれた時期が近いことに加え、作品の状況設定に「痛ましい事件」と共通する点がいくつか見られる。同時期に書かれた恋愛短編小説の好例として、まず「犬を連れた奥さん」の概略をあげてみよう。

主人公はディミトリー・グーロフ（Dmitri Dmitritch Gurov）という銀行家である。まだ四〇歳前だが（Duffy氏は推定四十四歳）、学生結婚をしたため、十二歳の娘と二人の息子がいる。妻は知識人（intellectual）気取りの可愛げのない女性で、グーロフはとうに妻への愛情を失くし、すでに何回も妻を裏切っている。女性に愛想の良い彼は、いわゆる、「女性に良く持てるタイプ」である。しかし、それはかえって彼の女性観を低くする結果となり、グーロフは女性のことを「低級な人種（the lower race）」と呼んでいる。（ダッフィ氏に比べ、グーロフのモラル意識が初めは低いことに注意）

この作品は全部で四つの場面からなり、最初の場面は黒海に臨む保養地ヤールタである。場面ごとに見ていこう。

（1）退屈している保養客の間に、「犬を連れた奥さん」の噂が広まり、プレイボーイのグーロフは「もし、彼女が夫も友人もなく、ここに一人で来ているのだったら、知り合いになるのも悪くはないな（‘If she is here alone without a husband or friends, it wouldn’t be amiss to make her acquaintance,’）」（563）[10] と考える。彼はレストランで女性が隣の席に座った機会をとらえて、声をかけ、首尾よくアンナ・セルゲイヴナ（Anna Sergeyevna）と知り合いになる。アンナはまだ女学生風が抜けきっていない若い人妻だった。

（2）次の場面ではグーロフが急速にアンナと親しくなる様子が描かれる。彼は毎日アンナに付き添い、馬車で一緒に出かけるようになる。ある夜遅く、波止場で船が着く様子を見物したあと、二人に一瞬の沈黙が訪れた。グーロフは「こんどはどこへ行きましょうか（Where shall we go now?）」と尋ねるが、女性は答えない。するとグーロフは「あたりを見回して」彼女にキスをし、「あなたのホテルへ行きましょう（Let’s go to your hotel.）」と言う。二人は足早に女性の部屋に行く。部屋は蒸し暑く、日本人の店で買った香料の匂いがした。

こうして妻のあるグーロフと夫のあるアンナは「親密な関係」になるが、アンナは彼がそれまでに知っていた女性たちとは異なっていた。彼女は事態を深刻に受け止めたのである。堕落した女になったと嘆くアンナを落ち着かせるために、グーロフは夜更けのオレアンダ公園へ連れ出す。二人はベンチに腰かけて海を見つめ、そのまま朝を迎える。夜から夜明けへと移り変わる海の様子、周辺の自然を見つめる心象風景が、グーロフの内的独白も交えて比較的長く示され、同じ海を見つめることで、二人が心を通わせていることが示される。

> So it [=the sound of the sea] must have sounded when there was no Yalta, no Oreanda here; so it sounds now, and it will sound as indifferently and monotonously <u>when we are all no more</u>. （Underline is mine.）（571）
>
> ここにヤールタもオレアンダもなくなってしまったとしても、［海は］そのような音をたてているのにちがいない。今もその音がしている。我々がここからいなくなったとしても、海は同じように無関心で単調な音をたてているだろう。（傍点は筆者）

叙述は三人称であるが、一部に‘we’が用いられている。いわゆる自由間接話法である。語り手の視点がいつの間にか、グーロフのそれと重なってしまったことがわかる。他にも、語り手の客観的な報告の中に、「あのいまいましい塀（that confounded fence）」（579）のように、グーロフの心情を示す言葉‘confounded’がさりげなく添えられることがある。間接話法、自由間接話法も多用されている。直接話法でグーロフの意見が示されることも多い。

その後アンナとグーロフは、常に行動を共にする親密な間柄になるが、夫から手紙が来て、アンナは家に帰ることになった。駅まで見送りに来たグーロフに、アンナは二度と会わないと言い置いて、去っていく。

（3）第三場面はモスクワに帰ったグーロフである。彼のつもりでは‘adventure’は‘adventure’として、すぐに元の生活に戻るはずであった。だが、意外にも彼はアンナを忘れることができず、常に面影が目にちらつくようになる。グーロフはせめてヤールタでの経験を誰かに話したいと思うが、人目を忍ぶ

ことなので他人に話すわけにもいかない。グーロフは考え込み、ふさぎ始める。次第に、妻や友人たちとの生活が、野蛮で下等なもののように思われようになった。グーロフの自己覚醒である。とうとう、彼はアンナの住むS市に出かけ、「芸者（*The Geisha*）」[11]の初演で劇場に町の名士が集まる機会を捕まえ、半ば強引にアンナと再会する。

（4）第四部はその後の二人である。アンナは夫に嘘をついて二、三か月に一度グーロフに会いに、モスクワにやってくるようになる。グーロフは、初めて人を愛したという自覚を持つ。しかし、今や、彼にとって大事なことはすべて、他人からは隠されたところにあると考えるようになっていた（582）。人目を忍ばねばならない間柄であることが、アンナとグーロフを苦しめる。なんとかして虚偽の生活から解放されたいと願いながら、その方策もみつからないまま、ホテルの一室で途方に暮れる二人を描いて「犬を連れた奥さん」は終わっている。

（二）コンスタンス・ガーネットの ‘The Lady with the Dog’ について

チェーホフの作品はイギリスではコンスタンス・ガーネット（Constance Garnett）の訳によって早くから知られ、若い世代の作家に多大の影響を与えた[12]。ガーネットはチェーホフ以外にも、ツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキーなどのロシア文学を翻訳し、イギリスではロシア文学はほとんど彼女の訳によって紹介され、読まれたと言ってよい。「犬を連れた奥さん」は1899年にロシアの雑誌『ロシア思想』12月号に発表されたあと、1903年に英訳が出ている。現在、「犬を連れた奥さん」の英訳はコンスタンス・ガーネットの他に、David Magarshackの ‘Lady with Lapdog’（*Penguin Classics*, 1964）に、Ronald Wilksの新訳’Lady with the Little Dog’（*Penguin Classics*, 2002）が出ている。本稿ではMagarshackの ‘Lady with Lapdog’ および神西清のロシア語からの邦訳を参考にしながら、ジョイスの時代の翻訳ということで、ガーネットの英訳を使った。

ところで、ジョイスがチェーホフの「犬を連れた奥さん」を読んだという記録はなく、読んだという蓋然性も低い。だが、同じ時代に書かれており、中年の男性をめぐる、似たような設定である。ちょうど雑誌隆盛で、短編小説という形式の物語が大量に生み出され、注目を集めていた時代である。ジョイスも『ダブリンの人びと』を書いていた頃は、短編小説という形式に関心も深く、おおいに研究していたはずである。偶然だろうが、1905年に二十三歳のジョイスが書いた「痛ましい事件」が、すでに人気作家であったチェーホフの「犬を連れた奥さん」と同じ題材――中年男性の ‘adventure’、つまり、夫も家庭もある女性との交際――を扱っているのは興味深い。しかし、チェーホフの「犬を連れた奥さん」は恋愛小説として立派に成立しているが、ジョイスの場合はそうなっていない。なぜなのだろうか。そこで、今度は「犬を連れた奥さん」との相違点に明らかにしながら、「痛ましい事件」を恋愛小説風に読んでみることにしたい。特に主人公の内面描写と叙述の方法に注意を払うことにする。

（三）「痛ましい事件」と「犬を連れた奥さん」の共通点

「痛ましい事件」と「犬を連れた奥さん」には幾つかの共通点が見られる。主人公が中年で銀行に勤めていること。また、ふとしたことから知り合った人妻との ‘adventure’ とその後の成り行きを描いており、その結果、主人公が自己覚醒に至る。ただし、どちらの場合も自己覚醒の結果は幸せには結びつかない。さらに、前半の終わりの部分に男女の別れがあり、自己覚醒は後半におきること。（グーロフとアン

ナは後半で再会する）最後に、叙述の方法が、どちらも男性主人公に視点をあてた、三人称による客観的な語りである、などである。

以上が主な共通点だが、その他にも、小さな類似点は多い。二人の出会いに音楽会が使われていること。（グーロフの場合はミュージカル『芸者』の初日、ダッフィ氏の場合はロタンダその他の音楽会の会場が出会いの場所となる）。二人が出会うのが主に夜であること（グーロフとアンナは深夜に散歩や馬車で外出、ダッフィ氏とシニコウ夫人は夜、人気のない通りを選んで散歩するか、またはシニコウ家の居間で語りあっている）。二人が心を通わせ合う重要な場所として、公園が使われている（「犬を連れた奥さん」はオレアンダ公園、「痛ましい事件」はフェニックス・パーク）など。

もちろん、二つの短編に違いはある。

まず、グーロフは二軒の家を持ち、妻子があるが、ダッフィ氏は独身である。グーロフは社交家で、裕福なブルジョワにふさわしい暮らしぶりだが、ダッフィ氏は郊外の古い家で世捨て人のように、質素な暮らしに甘んじている。また、グーロフはプレイボーイで、すぐにアンナと人目を忍ぶ仲になるが、ダッフィ氏は肉体的な接触の可能性が出てくると、すぐに交際を打ち切っている。その結果、女性（Mrs Sinico）は孤独に耐えられず飲酒をするようになり、ついには不慮の死をとげてしまう。これは大きな違いである。またダッフィ氏の場合、自己覚醒の瞬間は最後に劇的な形で訪れるが、グーロフの場合、第三部から第四部にかけて徐々に訪れる。また、覚醒した後の再生の望みについても違いがある。グーロフの方はアンナとの関係に現状改善の兆しのないまま、途方に暮れた状態で終わる。一方、ダッフィ氏の場合は、ショックを受け、道徳観念がずたずたになるが、覚醒する場所がフェニックス（不死鳥）・パークであることを考えると、再生の望みがあると見ることもできる（Tindall, p.33）。象徴性は、後でも述べるように、ジョイスの場合、見過ごすわけにはいかないのである。叙述の方法にも違いがあるが、それについてはこの後でさらに述べることにする。

Ⅲ. 恋愛小説として‘A Painful Case’を読む

（一）‘A Painful Case’の場合

「痛ましい事件」をラヴ・ストーリーとして読んでみよう。「犬を連れた奥さん」にならって四つの場面に分けて見ていく。

（1）まずジェイムズ・ダッフィ氏が、ダブリン（Dublin）の郊外チャペリゾッド（Chapelizod）に住んでいることが語られる。チャペリゾッドはトリスタンとイズーのロマンスの舞台となったところだが、語り手はそれには触れず、ダッフィ氏が世間から遠ざかっていたいために、できるだけ市の中心から離れて暮らすのだと説明される。

次にダッフィ氏の部屋の様子が示される。いっさいの装飾を排除した部屋の壁、少ない調度品、書棚に並んだ本などの描写から、ダッフィ氏が修道僧のように禁欲的で、孤独な生活を送っていることがわかる。家具のすべてを自分で選んでいることから、ダッフィ氏が強い意志を持ち、独自の人生観を持っていることも推察される。（グーロフの場合は、アンナに出合うまでは、平凡で快楽的な人間であった）ダッフィ氏がダブリン市の中心から離れて住んでいるのも、世俗的な価値を軽蔑する彼が、そこから一線を画したいためなのである。彼自身が選んだ家具は白と黒に統一され、そこから潔癖で、禁欲的、融通のきかない性格が浮かびあがる。ただ、ベッドの足元には黒と緋色（black and scarlet）のひざ掛け

がかけてあり、彼の内面に炎のあることが暗示されている。また、書き物机の中にはハウプトマンの翻訳原稿（後述）やメモ用紙があり、彼が思索を好むこと、書く人であることがわかる。（室内の物体を描写することによって、その持ち主の人物像を浮かび上がらせるこの手法は、『ユリシーズ』第17挿話で大々的に展開される）

次に彼が混乱というものを嫌う性格であることが語られる。

> Mr Duffy abhorred anything which betokened physical or mental disorder.（104）
> ダッフィ氏は身体的なものであれ、精神的なものであれ、秩序の乱れが大嫌いだった。

最後に、ダッフィ氏が「ダブリンの町と同じくらいくすんだ顔色（of the brown tint of Dublin streets）」（104）をしていること、毎日判で押したように規則的な生活をしていることが、スケッチ風に、淡々と語られる。ギフォード（Don Gifford）によれば、Duffyと言う名前は‘dark, dusk, black’を想起させるアイルランド語‘dub’または‘duff’に由来している[13]。孤独で禁欲的生活をしているダッフィ氏は、生きながら死んでいる（less living than dead）ようなものであるから、ダブリンと同じ、くすんだ色をしているのである。

ダッフィ氏の容貌については、黒い髪ととび色の口髭に覆われた重苦しい顔立ちの中で、目だけが人間的な弱さを示していると、肖像画のように具体的に描写されている。その目は「他人の中に埋め合わせをしようとする本能を見出そうと期待してきたが、常に失望してきた」（‘.... gave the impression of a man ever alert to greet a redeeming instinct in others but often disappointed’（104）印象を与えるとなっている。失望をたびたび経験した人の目なのである。

ダッフィ氏の人物描写で、最も注目されるのは、ダッフィ氏の奇妙な癖に関する部分だろう。彼には自分を他人のように横から眺め、自伝を書くように、自分の行動や感じ方を三人称、過去形で叙述する癖があった。（この部分はナレーターによる客観的な報告文になっている）

> ....He lived at a little distance from his body, regarding his own acts with doubtful side-glances. He had an odd autobiographical habit which led him to compose in his mind from time to time a short sentence about himself containing a subject in the third person and a predicate in the past tense.（104）
> ....彼は肉体から少し距離を置き、自分自身の行動を疑わしげに横目で見ながら生きていた。彼には奇妙な自伝風の癖があって、心の中で時々自分自身についての短い文章を、三人称過去形で叙述するのだった。

ダッフィ氏のこの奇妙な癖は、もしそれが本当なら、この物語そのものもダッフィ氏の語りによるもので、ここに語られていることは、実は、彼自身の経験の告白なのではないかという疑惑を読者に抱かせるものである。この短編では、語り手の視点は最初から最後まで、ダッフィ氏ひとりに重ねられており、別の人物からの視点による描写はない。そのため、語り手はダッフィ氏自身なのではないかという疑念が、より深まるのである。その場合、「彼には仲間も友人もなく、教会も信条も持たなかった（He had

neither companions nor friends, church nor creed.）」（105）という三人称過去形の叙述は、客観的な語り手による事実の報告というよりも、むしろ、ダッフィ氏自身がそう語っているのであって、ダッフィ氏の目標宣言だとも受け取れる。こう宣言することによって彼は理想を明らかにし、決意表明をしたのだろう。社会から離れ、一人で暮らしているダッフィ氏だが、それは彼が望んで、そのような生き方をしていた、ということかもしれないのである。

（2）次にシニコウ夫人（Mrs Sinico）との出会いと親しくなる過程が語られる。コンサート会場で隣り合わせ、女性（シニコウ夫人）の方から話しかけてきたのがきっかけだった。それは偶然のできごとだったが、その数週間後にまた別の音楽会場で再会するという偶然が重なった。最初に女性から話しかけられたとき、ダッフィ氏は物怖じしないその態度に驚いたが、二度目の出会いの時には、むしろ彼の方から、「親しくなる（become intimate）」ための努力をしている。横にいる娘の注意のそれるのを狙って、名前を聞きだしているのである。（この時、「犬を連れた奥さん」と同じように、女性の名字が外国風であることが話題になる。シニコウという名前は夫の曽祖父がイタリア人であったためであり、アンナの名字ディデリッツ（Diderits）は、夫の祖父がドイツ人であったためである）

三度目の偶然でまた出会った時、ダッフィ氏は思い切った行動をとった。「勇気をだして約束をとりつけた（....he found courage to make an appointment.）」のである。これはダッフィ氏にしては、異例な行動だった。しかも「彼女はやってきた（She came.）」。二人は逢引きを始める。初めのうちは、夜の静かな通りを選んで散歩をしていたが、人目を気にしたグーロフとは対照的に、ダッフィ氏は人目を忍ぶ交際になるのを嫌い、堂々とシニコウ家を訪問できるように取り計らった。夫のシニコウ船長（Captain Sinico）はオランダ航路の船長で留守がちだったうえ、ダッフィ氏を娘の求婚者と誤解したために、それが可能になったのだ。シニコウ夫人には成人した娘がいるが、音楽の稽古で外出することが多く、二人はたびたび二人きりの時間を過ごすことができた。

実は、このシニコウ夫人の家庭内での孤独が「痛ましい事件」の悲劇の伏線となっている。

「犬を連れた奥さん」でも、アンナの夫は、まだ若い妻を、ひとりでヤールタに保養にやっているが、この時代、上層階級の女性が付き添いなしに、ひとりで保養地に逗留するのは珍しい。ヤールタの滞在客の間で「犬を連れた奥さん」の出現が噂になったのも、そのためと考えられる。「犬を連れた奥さん」の場合も「痛ましい事件」の場合も、女性が家庭にあって孤立していることが、後の反社会的な恋愛につながる大事な要因となっているのが注目される。

（二）心の交流

「犬を連れた奥さん」と「痛ましい事件」で大きく異なるのは、それぞれの交流の仕方である。グーロフはドン・ファン的な女性にもてるタイプであるから、常に女性の意向を伺い、話を聞いてやっている。そのため、アンナはグーロフと一緒にいる時、彼女の方からも彼に劣らず話をしている（She talked a great deal and asked disconnected questions.）（568）。一方、ダッフィ氏の場合、交流は一方的である。話しているのはもっぱらダッフィ氏で、シニコウ夫人は聞き役にまわっている。

> ....Little by little he entangled his thoughts with hers. He lent her books, provided her with ideas, shared his intellectual life with her. She listened to all. (106)

‥‥少しずつ彼は自分の思想を彼女の思想に絡ませていった。彼は本を貸し与え、考えを述べ、彼女と知的生活を共有した。彼女はすべてに耳を傾けた。

シニコウ夫人からも「彼女自身の人生の事実をいくらか（she gave out some fact of her own life）」（106）彼に話してはいるが、母性的な彼女はほとんどの場合、ダッフィ氏に話をするように仕向け、彼の聴罪師（confessor）役に甘んじている。また、女性経験の豊富なグーロフはしばしばアンナを眺め、他の女性と比べる余裕があるが、ダッフィ氏は二人きりで話をしている時も自分の声だけを聞き、相手の目の中にも「天使ほどの身長の自分の姿」を見る始末である（Sometimes he caught himself listening to the sound of his own voice. He thought that in her eyes he would ascend to an angelical stature；）（107）。

感性豊かなシニコウ夫人という賛美者（聴罪師）を得てダッフィ氏は有頂天になる（This union exalted him.）[14]（107）が、一方で「魂の救いがたい孤独（the soul's incurable loneliness）」（107）を主張する内なる声も聞こえてくる。他人との交流なしに精神的な生活を送る（He lived his spiritual life without any communion with others....）（105）ことを信条とするダッフィ氏にすれば、これは当然の自己反省といえるだろう。

ある日、シニコウ夫人が多感な内面を表に出してしまった。ダッフィ氏の手を取り、それを彼女の頬に押しあてたのである。情熱的な行動に驚いたダッフィ氏は、ただちにこの交際を打ち切る決意をした。ティンダルはこの場面を指して、'She is ready, he unready.' と事態の滑稽な側面に読者の注意を喚起している（Tindall, p.31）。語り手の視点がダッフィ氏に重なっていなければ、語り手は喜劇的に叙述することも可能だったかもしれない。

しかし、峻厳なダッフィ氏はあくまでもまじめである。

一方的に自分の考えを話すだけで、相手の心中を推し量ることも、相手の話を聞くこともしなかった彼は、シニコウ夫人の突然の感情の発露に度肝を抜かれた。彼は幻滅し、慎重に身を引く算段をはかる。一週間の冷却期間を置いたうえで、シニコウ夫人を呼び出し、交際に終止符を打つことを提案したのだ。その説得がいかに難しく、あやういものであったか、それは夫人の同意を得るまでに、二人が夜のフェニックス・パークを3時間も歩かねばならなかったこと、最後にはダッフィ氏が逃げるように、彼女のそばを離れなければならなかった事実が如実に示している。語り手は「二人は交際を打ち切ることに同意した（They agreed to break off their intercourse:）（108）と言っているが、はたしてこれが客観的な報告と言えるものかどうか。「交際」と言う意味を表すのに、わざわざと肉体的な関係を暗示させる 'intercourse' という言葉が使われているが、肉体的接触を毛嫌いするダッフィ氏の使いそうな言葉である。自らを三人称、過去形で叙述するダッフィ氏の奇妙な癖を、読者はここで思い出すに違いない。

叙述の仕方にも目を向けてみたい。「犬を連れた奥さん」には、'Gurov looked at her and thought: "What different people one meets in the world!"（568）のようにグーロフが直接話法で自分の内面を語ったり、'He walked up and down, and loathed the grey fence more and more, and by now he thought irritably that Anna Sergeyevna had forgotten him....'（578-9）のように、間接話法でグーロフの心のうちが示される描写が多くある。他に自由間接話法、'Most likely this was the

husband whom at Yalta, in a rush of bitter feeling, she had called a flunkey.’（580）のように内的独白に近いものまで、グーロフの心の動きは常に様々な形で読者に示される。また、グーロフは、アンナへの愛を自覚する前も自覚した後も、アンナ・セルゲイヴナのことを考えており、そうした行動からも読者はグーロフのアンナへの想いを推察できるわけだが、「痛ましい事件」ではダッフィ氏がシニコウ夫人のことを考える様子は示されない。それどころか、「痛ましい事件」にはダッフィ氏の内面を示す描写が、ここに至るまで、ほとんど存在しないのである。

では、ダッフィ氏はシニコウ夫人のことを考えなかったのだろうか。

ダッフィ氏の考えが間接話法で示される場面はある。たとえば、ダッフィ氏がアイルランド社会主義者党の会合に出ていたことがあると告白する場面や、続いて、シニコウ夫人に「なぜ考えるところを本に書いて世間に問わないのですか」と聞かれ、「何のために（For what?）と問い返すところに彼の意見は示されている。ダッフィ氏は ‘For what?’ の後にさらに、「一分と続けて考えることさえできない売文業者と競うために？（To compete with phrasemongers, incapable of thinking consecutively for sixty seconds? ）と言葉を重ねている。皮肉な問いかけの口調と「売文業者」という言葉から、出版界と世間に対する彼の強い侮蔑感が感じ取れる。しかし、これは男女の語らいとは別ものであろう。

このように俗世間を疎んじるダッフィ氏の意見はたびたび表明されるが、シニコウ夫人への感情は示されない。語り手は事実を報告し、物や出来事の描写はするけれども、描出話法や内的独白、あるいは直接話法をつかって、ダッフィ氏の内面描写をすることはしていない。少なくとも前半の部分ではそうである。

（三）「痛ましい事件」の後半部分

（3）ここから「痛ましい事件」は後半に入る。ダッフィ氏は元の生活に戻った。彼は交際を止めた後に、「男と男の間には、性的交流があってはならないから、愛は成立しない。男と女の間には、性的交流が不可欠だから、友情は成立しない（Love between man and man is impossible because there must not be sexual intercourse and friendship between man and woman is impossible because there must be sexual intercourse.）」（108）とメモに書きつけた。これは交際を一方的に打ち切ったことへの、ダッフィ氏の理論的言い訳と考えていいだろう。‘sexual intercourse’ と言う言葉に、彼の強いこだわりが見られる。

四年後のある日、ダッフィ氏は新聞記事を見て驚く。新聞にはシニコウ夫人が列車の線路を横切って死亡したという記事があった。新聞によると、夫人の死は轢死ではなく、列車に接触しただけだったが、日頃の飲酒癖のために死に至ったということだった。（この部分は、複数の証人の証言を並べていく、新聞独特の無機質な文体の長い引用が続く。ダッフィ氏が引きこまれるように、記事を読むさまが目に見えるようである。新聞記事や法律文など非日常的な文体の利用は『ユリシーズ』で盛んに使われる）

（4）ダッフィ氏は衝撃を受けた。上層中流階級の家の人であるシニコウ夫人が飲酒をするようになっていたのだ。最初の反応は、強い嫌悪感である。飲酒という悪癖のとりこになるような弱い女性を「魂の友（His soul’s companion!）」（111）と呼んだことに、ダッフィ氏は自己嫌悪を覚えた。彼女と別れたのは正しかったと、まずは自分の行動の正当性を考えて安堵するダッフィ氏だった。しかし、自分の部屋に戻ってからダッフィ氏は考え込む。

ダッフィ氏が覚醒するのはここからである。

As the light failed and his memory began to wander he thought her hand touched his. (112)
あたりが暗くなり、記憶がさまよい始めると、彼は彼女の手が彼の手に触れたように思った。

落ち着かない気分でダッフィ氏は外にでる。すでに夜遅く、中世の悲恋物語の場所、チャペリゾッド橋のたもとでパブに入ったダッフィ氏は、シニコウ夫人との交際を打ち切ったのは、ほんとうに正しかったのだろうかと自問し始める。

ここから語り手はダッフィ氏の内面を語り出す。これまでなかった描出話法が使われ始め、ダッフィ氏の胸の内の思いがつぎつぎに語られる。叙述は客観的な間接話法であるが、内的独白に近いかたちの描出話法でダッフィ氏の内面が示される。

He asked himself what else could he have done. He could not have carried on a comedy of deception with her; he could not have lived with her openly. (112)
彼にどうすることができただろうと彼は自問した。彼女と騙し合いの喜劇を演じることはできなかっただろうし、公然と一緒に暮らすわけにもいかなかった。

'what he could have done' ではなく 'what could he have done' と言う語順に、ダッフィ氏の苦々しい口調が聞き取れるようだ。モラリストのダッフィ氏らしい、皮肉なコメントである。この時初めて、ダッフィ氏にもシニコウ夫人を思いやる気持ちがわいてくる。シニコウ夫人の孤独に初めて思い至ったのだ。

Now that she was gone he understood how lonely her life must have been, sitting night after night alone <u>in that room</u>. His life would be lonely too until he, too, died, ceased to exist, became a memory — if anyone remembered him. (Underline is mine. 112-3)
こうしていなくなって初めて、彼女がどんなに寂しい生活を送っていたかが理解できた。毎晩毎晩あの部屋に一人ですわっていたのだ。彼の生活もさびしいものになるのだろう。彼もまた、死んで存在しなくなり、一つの記憶になったときには・・・もっとも、それは誰かが彼のことを覚えてくれていたら、の話である。（傍点は筆者）

「あの部屋に (in that room) 」という表現に、ダッフィ氏がシニコウ夫人の家を訪問した際の様子を思い出していることがわかる。また、文末の 'if anyone remembered him.' には「誰も覚えていないだろう」という、ダッフィ氏の苦々しい皮肉がこめられている[15)]。

ところで、「犬を連れた奥さん」の場合、グーロフはどの場面でも、一人になった時にはアンナのことを考え、アンナの顔を思い浮かべているが、「痛ましい事件」の場合、ダッフィ氏がシニコウ夫人のことを考える場面はこれまでなかった。

「犬を連れた奥さん」では直接話法、間接話法、描出話法、内的独白などさまざま手段でグーロフの心の中が逐一、読者に示される。それだけでなく、グーロフはたびたびアンナの「おもかげ（image）」を思い出し、追憶にふけり、時にはにっこりしている（He would pace a long time about his room, remembering it all and smiling;）（576）。通りを歩いていても、彼女に似た人を捜して通りすがりの女性を見つめている（In the street he watched the woman, looking for someone like her.）（576）。そうしたグーロフの行動から、読者は彼の気持ちを読み取ることができた。しかし、「痛ましい事件」の場合、一方的に交際を打ち切ったあと、ダッフィ氏がシニコウ夫人を思い出すことがあったのか、なかったのか、語り手はいっさい報告していない。それが、ここに至って、一転、語り手は描出話法を使ってダッフィ氏の心の動きを語り始める。

パブを出たダッフィ氏は、夜のフェニックス・パークの思い出の場所をさまよう。その行動からも彼の動揺の程度がわかる。彼の脳裏にシニコウ夫人のおもかげが浮かび、おもかげはダッフィ氏の手の感触に訴えかける[16]。

> ....He walked through the bleak alleys where they had walked four years before. She seemed to be near him in the darkness. At moments he seemed to feel her voice touch his ear, her hand touch his. He stood still to listen. Why had he withheld life from her? Why had he sentenced her to death? He felt his moral nature falling to pieces. (113)
> ....彼は四年前に二人で歩いた荒涼とした小道を通りぬけた。闇の中では彼女が近くにいるような気がした。時々、彼女の声が彼の耳に触れ、彼女の手が彼の手に触れるような気がした。彼は立ち止ってじっと耳を澄ました。なぜ彼女の命を阻止するようなことをしたのだろう。なぜ彼女に死を宣告してしまったのだろう。彼は自分の道徳観念が粉々に砕け散るのを感じた。

かつてシニコウ夫人が触れようとし、ダッフィ氏が拒んだ「接触（touch）」である。両者の合一（union）がダッフィ氏の心の中で成就する。そして、ダッフィ氏はついにシニコウ夫人を死に追いやったのは自分であると認めるのである。

「痛ましい事件」の最後の部分は、ダッフィ氏の心象風景のようである。語り手の視点は今やダッフィ氏の内面にぴたりと重なっている。公園には闇の中で逢引きをしている男女の影も見える。その人影をダッフィ氏は「堕落した、こそこそした愛（venal and furtive love）」と蔑む一方、「一人の人間が彼（＝私）を愛してくれたようだったのに、その人の人生と幸せを否定してしまった。私が恥辱、恥ずべき死へと追いやったのだ。（One human being had seemed to love him and he had denied her life and happiness: he had sentenced her to ignominy, a death of shame.）」（113）と後悔する。ダッフィ氏の遅い覚醒である。

今やダッフィ氏の耳には、遠くの汽車の音までが、彼女の名前のシラブル（Emily Sinico, Emily Sinico, Emily Sinico）[17]を繰り返しているように聞こえる。やがてその音も止むと、記憶は遠のき、ダッフィ氏のもちまえの懐疑的な性質が頭をもちあげる。もはや闇の中に彼女の声は聞こえてこない。しかし、事実はそうであっても、ダッフィ氏が一心にシニコウ夫人を思い出し、もういちどその手にふれ、声

を聞きたいと思いつめていることは、読者に確実に伝わってくる。遠くにダブリン市内を見渡す小高い夜の丘の上で、ダッフィ氏が孤独を感じるところでこの作品は終わっている。

（四）技巧としての象徴性

『ダブリンの人びと』は文章が極度に凝縮されている。用語も文章の展開も一分の無駄なく、極端に切り詰められている。しかも、技巧的で象徴性に富んでいる。それはこの若い作家の知性の集中度の並々でないことを示している。それが『ダブリンの人びと』の大きな魅力である。叙述の方法も技巧的だが、「痛ましい事件」の象徴性についても触れておきたい。この作品ではカトリックの宗教用語が数多く使われている。男女の交際を ‘communion’（聖体拝領）や ‘ruined confessional’（邪魔の入った告解）と言い表したり、自分の過去を語るダッフィ氏に対し、それを聞くシニコウ夫人を「聴罪司祭（confessor）」に喩えるのがそれである。また、シニコウ夫人の死を伝える新聞記事を、ダッフィ氏は「密誦の祈りを唱える司祭がやるように、唇を動かしながら読んで（moving his lips as a priest does when he reads the prayers Secreto）」（109）いる。これも作者の意図的な暗喩だろう。

同様に、チャペリゾッドと言う地名、引き出しの中の原稿の『マイケル・クラマー（Michael Kramer）』の書名にも意味がある。ダッフィ氏が翻訳しているハウプトマン（Gerhart Hauptmann）の戯曲『マイケル・クラマー』は、峻厳な父とボヘミアンな芸術家の息子の確執を扱ったもので、息子は最後に自殺する[18]。愛情があれば息子を救えたかもしれないと父親は反省するのだが、それはそのまま、ダッフィ氏とシニコウ夫人の関係を象徴するのである。

若いジョイスとは異なり、三十九歳のチェーホフの短編は読者に過度の集中心を強制しないと言う意味で、無理なく自然に展開する。ジョイスも『ユリシーズ』になると、余裕が出てさらに滑稽味が加わり、饒舌になっていく。それはそれで読者にとってはまた手ごわい文体ではあるのだが。

（五）結論

「痛ましい事件」のダッフィ氏は冷笑的な審美家である。シニコウ夫人が手を触れただけで、恐れをなし、交際を打ち切ったのは、ダッフィ氏の一方的な行為だった。とはいえ、その彼が、夫も家庭もあるのを承知で、女性を外に呼び出し、自宅に足しげく通うようになったのは、ダッフィ氏自身は気づいていなくても、やはり彼女を愛していたからに違いない。

チェーホフの「犬を連れた奥さん」の場合は、保養地で知り合った女性との、つかの間の恋がいつしか真剣な恋となり、深くものを思う人となった中年男性を描いている。チェーホフはその過程を四つの場面に分け、その時々のグーロフの内面をさまざまな手法で提示して、読者の共感をグーロフに集めるように工夫した。道ならぬ恋に走る主人公たちに読者が反発を覚えず、共感していくのは、そのためである。一方、ジョイスの「痛ましい事件」の場合、クライマックスの直前に至るまで、主人公の思想信条は知らされても、心の中までは読者に知らされない。しかし別れた女性の不慮の死を新聞記事で知るという劇的な展開のあとで、主人公の心模様が集中的に示される。それによって読者の共感は一気に高まり、劇的な効果をあげている。実際には ‘lovelessness’ の物語であるのに、ラヴ・ストーリーのような強い印象を受けるのは、厳正な言葉選びとこの綿密な構成によるものだろう。

注

1) William York Tindall, *A Reader's Guide to James Joyce* (Syracuse University Press, 1959) , p.31.「愛の欠如」については ‘defect of love’ とも言い表されている。(p.50)
2) *Dubliners*の15編の短編のそれぞれの主人公に、作者（＝ジョイス）の個人的体験が反映されているというTindallの考え方による。‘possible Joyce’ については本稿3頁を参照。また、拙稿「『ダブリンの人びと』──『ユリシーズ』に至る発展の経緯──」（奈良大学紀要第41号、2013）も合わせて参照されたい。
3) テキストの引用はTerence Brown ed., *Dubliners* (London: Penguin Books, 1992) から括弧内にその頁数を数字で示した。訳はすべて筆者によるものである。
4) ‘epiphany’ はカトリックの用語で神の出現を意味するが、ものごと、人物の本質が瞬間的に明らかになること、その光景をさす。‘radiance’ も ‘epiphany’ と同じ意味で用いられている。
5) Tindallによれば、その原因はスティーヴン自身に自分の全体像が見えていないところにある。スティーヴン（＝ジョイス）が最終的に自由を手に入れたとわかるのは『ユリシーズ』においてで、『若き芸術家の肖像』では、スティーヴンを ‘young rebel’ あるいは ‘romantic egoist’ と造形したために、彼のもう一つの特性である ‘gay and witty’ な面を発揮することができなかった、あまりにも ‘serious’ に描かれてしまったからだ、としている。Tindall, *A Reader's Guide to James Joyce*, pp.50-3.
6) ジョイスの目的は祖国の「道徳の歴史」の一章を書き、その「精神的解放」を目指すことだった。
7) ‘After the Race’ の主人公の名もJimmyで、Jamesの変形であるが、これもまた ‘possible Joyces’ の肖像のひとつだろう。
8) Giffordによると、銀行の出納局長（副支配人）という重要な地位である。Don Gifford, *Joyce Annotated*, p. 84.
9) 改訂の跡については、Hans W. Gabler ed. *Dubliners* (Garland Publishing, 1993) で確認することができる。
10) 「犬を連れた奥さん」の引用はConstance Garnettによる英訳（Everymn's Library版）からの頁を括弧内に数字で表した。訳は筆者による訳である。
11) 1896年ロンドン初演のミュージカル・コメディー。アメリカ、ヨーロッパ各地でも上演され、人気を博した。*Ullyses*第六挿話357行目にも登場する。
12) 作家David Garnettの母親でもある。
13) Gifford, *Joyce Annotated*, p.81.
14) 彼を有頂天にした「交際」を表す単語として ‘union’ が使われているが、この ‘union’ はグーロフとアンナの場合のように肉体の「合一」を意味しているのではなく、魂と魂の精神的な「合一」、つまり「交流」をさすものであろうことは、その直前の描写から明らかである。
15) 似た例として、第一段階の最後で、ダッフィ氏の規則正しい生活ぶりが説明される最後のところに、‘an adventureless tale’ と付け加えてある部分をあげることができる。He allowed himself to think that in certain circumstances he would rob his bank but, as these circumstances never arose, his life rolled out evenly — an adventureless tale. (105) これもまたダッフィ氏の自嘲的なコメントと考えられる。
16) Tindallは ‘love’ と ‘touch’ 、そして ‘alone’ がこの作品のキーワードであると述べ、さらに ‘touch’ と ‘alone’ は次作『若き芸術家の肖像』の重要なテーマとして引き継がれていると述べている。Tindall, *A Reader's Guide to James Joyce* p.32.
17) Garbler ed. *Dubliners*, pp.96-7.
18) Gifford, *Joyce Annotated*, pp.82-4.

Bibliography:

Chekhov, Anton. *Lady with Lapdog and Other Stories*. Magarshack, David. trans. Penguin Classics, 1964.

Chekhov, Anton. 'The Lady with the Dog'. *My Life and Other Stories*, translated from Russian by Constance Garnett. Everyman's Library, 1992.

Ellman, Richard. *James Joyce*. Oxford University Press, 1959, 1983.

Gifford, Don. *Joyce Annotated : Notes for* Dubliners *and* A Portrait of the Artist as a Young Man. 2nd Edition. University of California Press, 1982.

Henke, Suzette A. 'Through a Cracked Looking-Glass : Desire and Frustration in *Dubliners'. James Joyce and the Politics of Desire*. Routledge, 1990.

Joyce, James. *Dubliners*. Brown, Terence ed. London: Penguin Books, 1992 .

Dubliners. Gabler, Hans Walter ed. Garland Publishing, New York & London, 1993.

Sellected Letters of James Joyce. Ellman, Richard, ed. Faber and Faber,1975, 1992.

Kenner, Hugh. *Dublin's Joyce*. Columbia University Press, 1987.

Riquelme, John Paul. '*Stephen Hero, Dubliners*, and *A Portrait of the Artist as a Young Man*: styles of realism and fantasy.' *The Cambridge Companion to James Joyce*. Attridge, Derek ed. Cambridge University Press, 1990.

Sholes, Robert. 'Semiotic Approaches to a Fictional Test: Joyce's "Eveline".' *Foundational Essays in James Joyce Studies*. Gillespie, Michael Patrick, ed. University Press of Florida, 2011.

Staley, Thomas F. 'Moral Responsibility in Joyce's "Clay"' *Foundational Essays in James Joyce Studies*. Gillespie, Michael Patrick, ed. University Press of Florida, 2011.

Tindall, William York. *A Reader's Guide to James Joyce*. Syracuse University Press, 1959 .

Walzl, Florence L. 'The Liturgy of the Epiphany Season and the Epiphanies of Joyce.' *Foundational Essays in James Joyce Studies*. Gillespie, Michael Patrick, ed. University Press of Florida, 2011.

清水道子「『犬を連れた奥さん』の語りの視点──グーロフの内面描写の視点の変化を中心に──」東京大学文学部露文研究室年報*Rusistika*第6号、1989.

ジョイス、ジェイムズ　『ダブリンの市民』高松雄一訳（集英社、1999年）

『ダブリンの市民』結城英雄訳（岩波文庫、2004年）

チェーホフ、アントン「犬を連れた奥さん」神西清訳『チェーホフ』世界の文学（中央公論社、1964）

中尾真理「『ダブリンの人びと』─『ユリシーズ』に至る発展の経緯─」奈良大学紀要第41号（奈良大学、2013年3月）

原卓也（編）『チェーホフ研究』（中央公論社、1960年）

Oxford Dictionary of National Biography. Oxford University Press, 2004.

Summary

The theme of ‘A Painful Case’ is, according to William Y. Tindall, ‘lovelessness’. ‘Lovelessness’ is, along with ‘paralysis’ and ‘revelation (epiphany)’, one of the main themes that James Joyce deals with in his earlier works such as *Dubliners* and *A Portrait of the Artist as a Young Man*. It is curious, when we think of it, that of the 15 stories of *Dubliners*, not one of them, we can call a ‘love story’.

‘A Painful Case’ (written in 1905-6) is the story of Mr Duffy and the failure of his ‘adventure’ with a lady. Mr Duffy, a middle aged bachelor, ascetic and ‘less living than dead’, becomes acquainted with the sensitive Mrs Sinico. Though he is exalted to have such a companion, Mr Duffy is very much surprized when that lady, Mrs Sinico, wants to ‘touch’ his hand passionately. He decides to put an end to their ‘communion’. Four years later he learns that she was killed by a train accident. She had fallen into alcohol dependence after their parting.

Anton Chekhov tells us a different story from a similar start with similar settings. ‘The Lady with the Dog’ (1899) is a ‘ love story’. It’s hero is Dmitri D. Gurov, a Moscow banker with a wife and three children. Gurov meets with a lady with a lapdog, Anna Sergeyvna, at Yalta and becomes intimate with her. Though he intends to forget the temporary union and return to his Moscow life as if nothing has happened, to his perplexity, Anna’s image keeps hanging on him....

In this paper, firstly, I will try to reread ‘A Painful Case’ as a love story comparing it with Chekhov’s ‘ The Lady with the Dog’ and, secondly, see if we can get any idea about young Joyce’s strategy for short stories. Both stories deal with unsocial relations between a man and a woman. Both stories are narrated objectively and end with the male protagonist’s self-realization. But Joyce selects his words carefully and reduces description to the minimum, only slipping unobtrusively two or three adjectives which convey Mr Duffy’s opinion into his cool narration. He definitely refrains from revealing the inside of his characters. His omitting inner descriptions until the final self-realization scene gives dramatic emphasis to Mr Duffy’s loss of love.

Key words: love story, ‘The Lady with the Dog’, inner description